



菊地則雄：海の近くの自然誌博物館 —千葉県立中央博物館分館 海の博物館の場合—

1. 海の博物館の考え方

千葉県立中央博物館は、平成元年2月にオープンした。つまり、平成11年は創立10周年にあたる。その節目の今年、3月12日に中央博物館の分館である「海の博物館」が、房総半島南部太平洋岸の千葉県勝浦市に開館した。

分館海の博物館の建設構想は中央博物館の建設構想と同時に進められたもので、その目的は、人々が豊かな自然環境の中で海の自然に直接触れあえる場を作るとともに、中央博物館の野外における機能を補完する場となることにある。

海の自然に直接触れあえる博物館とはどのような博物館であろうか。様々な考え方があると思うが、私たちは、「展示室の役割は、海の自然についての知識を得るとともに、海に出るきっかけを得る場であり、海そのものも展示の一部である」こと、そして、「海における活動を数多く主催し、実際の海の自然そのものを体験してもらうことができる博物館とすること」と考え、分館海の博物館の設置準備にあたってきた。

2. 教育普及、展示活動

それらの考え方を実践すべく、分館海の博物館では教育普及活動のうち、特に野外における活動をメインに行っている。例えば、海の自然とりわけ海洋生物に関する数多くの観察会を開催したり、展示室を見て実際の海も見てみたいなどと考えた人がその場で参加できる当日申込制の短時間の観察会「フィールドトリップ」を開催したりしている。平成11年度は、観察会は土・日曜日を中心に年間15回、フィールドトリップは平日に年間33回行う予定である。

展示室は、博物館の最も一般来館者の利用頻度が高い部分として、小規模ながらも中身の充実した仕上がりとなっている。展示室は「房総の海」、「さまざまな海の姿」、「博物館をとりまく自然」、「海と遊ぼう」の4つのコーナーからなり、房総の海の自然について、博物館周辺を中心に紹介している。最後の「海と遊ぼう」のコーナーでは、魚の皮膚に触れてみたり、生物が発する音を聴いてみたり、といった体験型の展示と

なっており、実際に海に出るきっかけとなるように作られている。展示は、ところどころ交換可能なシステムになっており、季節や最新の情報に応じて新しい話題に交換することになっている。

常設展示の他に企画展「マリンサイエンスギャラリー」を年1回開催する。平成11年度は11月2日～12月12日にかけて「貝達の巧みな生活—房総半島の貝の世界—」を開催する予定である。

3. 資料収集、調査研究活動

資料収集と、資料が中心の調査研究活動は博物館本来の機能である。分館海の博物館はそのために必要な様々な施設を備えている。

収蔵庫としては、乾燥収蔵庫、液浸収蔵庫の他に、体長2mまでの大型魚類等をそのまま液浸標本として保存できる大きな収蔵プールを備えた大型標本収蔵庫がある(図1)。これは国内の博物館では他に類を見ない特筆すべき施設であろう。また、展示や教育普及活動に直接活用できる画像や映像を編集する機器を備えた映像情報室や、それらの資料を保管する映像資料保管庫も有している。

また、博物館としては珍しく、大型室内飼育水槽や小型のガラス水槽などを備えた海水飼育設備を有し、魚や無脊椎動物の飼育を行っている。もちろん水族館

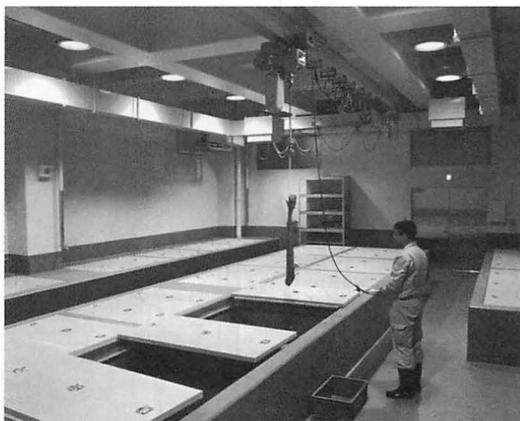


図1. 大型標本収蔵庫 (写真 小平忠生氏)。

から比べるときわめて小規模ではあるが、ここで飼育される動物は、研究用だけでなく、展示用にも用いられる。

その他、海洋生物を研究するのに必要な施設が一通り備えられており、臨海実験所としての機能も果たしている。具体的な調査研究活動に関しては、予算等の制約もあり、思うような計画が立てられないのが現状である。現在は、各研究員が自分の専門的な研究を進めるとともに、勝浦周辺の海洋生物相やその生態などについて調査を開始している状況である。

4. 組織

スタッフは分館長と、研究員9名、事務職員3名、展示室や野外で来館者の体験学習の指導にあたる嘱託職員2名の総勢15名からなる。研究員の専門分野は、魚類が分館長を含めて4名、無脊椎動物が5名、藻類が1名となっている。研究員は、それぞれの専門を活かして資料収集、調査研究を行うとともに、観察会や講座の講師を務めたり、企画展や展示交換の業務を担当したりする。

海の博物館は中央博物館の分館であるので、事業は基本的に中央博物館本館と協力して推進するが、現在は、調査研究活動等は別個に行われている。資料の登録は完全に別に行われており、登録のための略号等は近日中に整備する予定にしている。分館海の博物館独自で、資料の交換等も積極的に行っていきたいと考えているので、ご協力をお願いしたい。

5. さて、藻類関係は...

「博物館と藻類」のコーナーである。最後に藻類のことについて書いておく。

展示室には現在、標本、模型、写真などを合わせて、



図2. 「勝浦のカジメ海中林」ジオラマ (写真 小平忠生氏)。

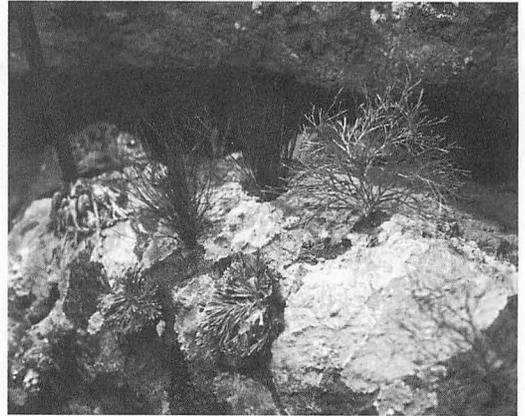


図3. 「勝浦のカジメ海中林」ジオラマ内の海藻。チャシオグサ、イチメガサ、カキノテなどが見られる (写真 小平忠生氏)。

約80種の藻類が展示されている。一般の人にとって、海洋生物の中で「海藻」はやはりマイナーなようである。原稿を書いている時点で、分館海の博物館が開館して1ヶ月弱であるが、展示室を見回っていると海藻の人気は今ひとつである。勝浦はカジメ海中林が発達している地であり、海中林のジオラマ（結構良くできていると自負している）を作った（図2, 3）が、多くの人はカジメをワカメと間違えており、説明しないとわからない状況である。

とは言え、カジメ海中林はインパクトはあるようで、驚きの声を上げる人も多い。また、分館海の博物館設置準備委員会委員長をしていただいた筑波大の横濱康継先生の方式を取り入れた海藻おしばいのバインダーは結構好評で、「きれい」という声が多い。さらに、岩にピンクのペンキを塗っただけのような部分が実は無節サンゴモという海藻なのです、という展示を作ったら、博物館前の磯で「このピンクのも海藻なんだって書いてあったよ。」と子供に自慢げに話しているお父さんを見かけた。少ないながらも藻類に興味を持ってくれる人が出てきてくれれば良いと考えている。あといくつか藻類ネタの展示を考えてあるが、これからも努力していきたいところである。

教育普及活動としては、藻類関係の観察会を年2回、講座を年2回予定している。また、フィールドトリップの担当が年5回となっている。観察会、講座は、1回を分類学的な、というとかたくなるしいが、勝浦にはどんな海藻があるのか、どんな生活をしているのか、種類を見分けるのはどうやってやるのか、という内容と、もう1回は、海藻の利用について、つまり、食



図4.フィールドトリップ第1回「磯の生きもの1」の様子。平成11年4月2日、海の博物館前の磯。

用などとして利用される海藻の観察と、その利用方法などについて紹介する、という内容にしようと考えている。4月2日に10名の参加者を得て、フィールドトリップの第1回目を行ったが(図4)、参加者の反応は好評であり、特に小さな子供さんに楽しんでいただけたようだった。その他の行事は、原稿を書いている段階ではまだ行っていないので参加者の反応等は不明だが、藻類の魅力を知っていただける行事を心がけたい。

調査研究施設としては、培養施設(恒温器など)や顕微鏡類など、必要な設備は揃えられた。予算の制約は厳しい限りだが、後は内容次第である。これも努力するしかない。現在のところ、勝浦周辺の海藻相を調査するとともに、数年後に計画している企画展「海の絶滅危惧生物(仮題)」のひとつにあたる紅藻アサクサノリの生育調査や原始紅藻数種の分類学的な研究を進

めているところである。

収蔵施設も藻類専用とはいかないが、乾燥収蔵庫内に十分なスペースがあり、房総を中心とした収集を行っている。ローカルな博物館ではあるが、海の近くにある利点を活かして、まずは、博物館周辺の海藻の季節的な消長がわかるような、定期的かつ長期的な収集活動を行っていく予定である。

分館海の博物館周辺の海藻相はまだ十分に調べられていないものの、200種以上の大型藻の生育が確認されている。残念ながら宿泊施設を欠くが、採集その他で、多くの藻類研究者に分館海の博物館をご利用いただければと思う。

(千葉県立中央博物館分館海の博物館)

【千葉県立中央博物館分館海の博物館】

所在地：〒299-5242 千葉県勝浦市吉尾123番地

TEL：0470-76-1133, FAX：0470-76-1821

インターネットホームページ：「千葉の県立博物館」

<http://www.chiba-muse.or.jp>

交通：JR外房線鞆原駅から徒歩15分、勝浦駅から小湊鉄道バス興津経由「松野」行き「吉尾入口」下車徒歩12分、勝浦駅から小湊鉄道バス「海中公園センター」行き終点下車徒歩1分(土・日曜日・祝日のみ)

開館時間：9:00～16:30

休館日：毎週月曜日(ただし月曜日が休日にあたる場合は翌日)・年末年始(12月26日～1月4日)・その他の臨時休館日

入館料：無料(ただし駐車場は有料：普通車2時間まで200円)。

